



近江の平安彫像

—前期—

はじめに

近江における平安時代は、延暦4年(785)最澄が比叡山に登り、草庵を結んだことに始まるといつてよいでしょう。延暦寺根本中堂の本尊薬師如来立像は、虚空蔵尾に自倒していた霊木を最澄みずから彫刻したもので、のち初代座主義真は最澄の遺言により、肉身部に金色、着衣に彩色を加えたと伝えられています。九世紀の延暦寺は堂塔の建立が着々となされ、仏像も数多く制作されました。ところが、承平5年(935)以後、幾度となく火災や兵火にみまわれてしまいました。承平の火災では難をのがれた根本薬師像も永享7年(1435)には焼失したとみられます。織田信長の焼打ちにもあった延暦寺では、平安前期の彫像のほとんどすべてを失っています。

そのためこの時期の彫刻史には大きな空白を生じましたが、この近江の各地にはすぐれた平安前期彫像を数多く伝存しています。ここでは日本の彫刻史のピークをなす九世紀の彫像を中心に紹介したいとおもいます。

己高山文化圏の彫像

近江に現存する作例のうち、平安時代の劈頭に位置するのが鶏足寺の木造薬師如来立像と乾漆十二神将像です。鶏足寺は湖北己高山の中心寺院であった観音寺の別院です。己高山頂にあった観音寺は、現在礎石を残すのみで、本尊の十一面観音像も鶏足寺に移されています。己高山には泰澄開基伝説があり、山林修行者の道場として出発しています。十世紀後半に入りますと天台系の寺院となると考えられるのですが、それ以前は南都・興福寺系に属していました。

鶏足寺の薬師如来像は、与志漏神社境内にある薬師堂の本尊であったもので、当初は、これも観音寺別院である法華寺の本尊であっ



薬師如来立像 鶏足寺

たと考えられます。像高 184センチの一木彫成
像で、漆箔の漆下地が厚く施されています。
わずかにのこる金箔は後世のものでしょう。

頭部は大きく造られ、初めは螺髪が植付け
られていました。頬は豊かな張りをみせ、耳
も大振りです。体部も量感豊かで、肥満して
いますが、いかにも堅太りといった風です。
胸は厚く、両太腿は衣褶を刻みださずに大き
く盛り上っています。両腰脇から両足中央に
集まって垂下する衣文の流れは、この太腿の
量感を強調しています。また重量感のみなき
った堂々たる作風をもち、平安初期彫像の特
徴をよく備えています。しかし顔の表現は穏
やかですし、着衣には翻波式衣文が現れてい
ません。技法的にも様式的にも八世紀後半期
の要素が残存しています。八世紀ごく末から
九世紀初頭のころに制作されたものでしょう。

十二神将像は、この薬師像の護法神です。
ただし、12軀あるうち3軀だけが古く、あとの
9軀はのちの時代に補足されたものです。
古い3軀の像は木心乾漆造という技法によっ
て造られています。これは大体の形を木心で
造り、その上に乾漆で塑形したもので、奈良
時代後半から現れます。この十二神将像では、
頭部から岩座まで共木で彫りだして木心とし
ています。平安時代になると乾漆は次第に薄
くなりますが、ここではまだ十分な厚さをも
っています。像高90センチ前後で、あまり大
きな像とはいえませんが、本尊の薬師像と同
時に造像されたと考えてよいでしょう。中央
との関係も考慮すべきで、この地方の伊香連
の存在を無視できません。

さて、あの有名な十一面観音像のある向源
寺も、己高山の近くにあります。像高は 177
センチあり、頭・体部を通して、台座の蓮肉
まで含めて一材より造りだされています。内
刻りは、背面にて上下二段に施されています。
頭髪には薄く乾漆を盛り上げて毛筋を刻み、
髻頂に一面、天冠台上の地髪に七面を植付け、
さらに本面の両耳後ろにも瞋怒相と利牙上相

の脇面をつけています。この本面の両側に各
一面をつけるのは、俗にいう三面千手の形式
で、十一面観音像には珍しいものです。頂上
の菩薩面も、通形の十一面観音では仏面をつ
けます。さらに両耳朶には、大きく見事な耳
璫（耳飾り）がつけられています。このよう
な耳璫は唐から請来された東寺の兜跋毘沙門
天像や観智院の五大虚空蔵像にもみられます。
平安時代初期の入唐僧などによってもたらさ
れた新しい図像をもとに、この像の制作がな



十一面観音立像 向源寺（永野太造氏提供）

されたのでしょうか。本面や頭上面の表現も晩唐ごろの様式をふまえています。

わずかに腰を左にひねり、裳裾も少し後方になびいています。この像にても太腿は大きくあらわされ、膝下でU字形を描く衣文に翻波がみられます。背面に回ると、裳の美しくかつ流動的な衣褶が目にとまります。右手は膝がしらまで長く垂下し、アンバランスなのですが不自然さは感じられません。両前膊から垂れる天衣にも動勢がみてとれます。端麗な顔、その姿態、裳や天衣の衣褶、そのいずれをとってみても破綻がありません。九世紀前半の頂点にたつ彫像のひとつに数えあげられるでしょう。

この像には彩色、漆箔の痕がわずかに認められますが、これは後世のもので、当初は素地仕上げであろうといわれています。しかし頭髪部に乾漆が使われているところから、素木像であったとは考えられない、という説もあります。たしかに乾漆を補助的にでも使用している像の仕上げは彩色か漆箔が一般的です。なお検討の余地を残していますが、精緻な彫りをみせているこの十一面観音像には素木の肌が似合っているようです。

応永14年(1407)の『己高山縁起』に、最澄が己高山に入って多くの仏像を作り、その中に渡岸寺十一面との記事があります。としますと初期天台宗の貴重な彫像といえるのですが、この地域に天台宗の勢力が及んでくるのは、先に記したように十世紀後半になってからです。結論を下すのは難しいのですが、やはり己高山文化圏のなかで考えた方が良くとおもいます。一説によると、信長の叡山焼打ちのとき、山上からこの地に移されたともいいますが、実証することはできません。

天台宗の九世紀彫刻

草津市下寺にある常教寺の観音堂に木造観音菩薩立像が祀られています。もとは芦蒲観音寺の下寺にあったと伝えられている像です。心去りの一材にて彫りだしており、右手首、



観音菩薩立像 常教寺

左手臂、両足先にわずかに別材を矧いでいます。また条帛の結び目、両手の臂釧と腕釧も別材で精巧に造ったものを取り付けています。92.9センチという像高以上に大きく感じられる像です。宝髻は低く、頭部も比較的小さめですが、顔の表情は目尻があがり、きびしいものがあります。肩の張り、胸の引き締りもこの像の精かんさを現しています。着衣の彫りは深く、するどい彫り口をみせています。条帛や裳には美しい翻波が刻まれ、裳裾近く

の正面中央に渦文が造りだされています。

右足を軽く踏み出した姿勢には動きがあります。着衣の表現と相まっていきいきとした生動感があるといえましょう。彩色は上半身では剥落が目立ちますが、裳の部分には朱や緑青など当初の彩色をよく残しています。造像期は九世紀なかばすぎころでしょう。

延暦寺にわずかに伝存された平安前期彫像として貴重なのは木造千手観音立像です。像高51センチの檀像風のもので、頭上の各面や後補の脇手を除くと蓮肉まで共木で彫りだした一木彫成像です。その異国的な風貌には、請来像をおもわせるものがあります。おそらくはこの像の初発性からくるのでしょう。切れ長の大きな目が印象的です。鼻筋も通り、面幅のわりには顎が小さく造られています。

裳の折り返し部の衣褶のたたみ方は、あまり類例をみませんが、この時期特有の渦文が



千手観音立像 延暦寺

刻まれています。膝下の翻波式衣文も効果的であり、全体にシャープな刀の切れ味を示しています。この像にのこされている彩色がどこまで当初のものか判断しにくいのですが、造像当初からこのような彩色像であったと考えています。制作されたのは九世紀も終わりのころではないでしょうか。

園城寺の木造十一面観音立像も檀像風の一木彫成像で、延暦寺千手像にややおくれで造像されたと考えられます。像高82センチで、頭部が大きく造られています。筆者はこの像を親しく調べておりませんが、ずんぐりとした体軀をもち、裳には渦文と翻波式衣文が強い彫り口をもって現されています。胸飾の彫りも精緻であり、すぐれた檀像彫刻のひとつです。この像にも彩色が施され、背面には切金による菊花文が認められるといえます。

延暦寺の千手観音像と園城寺の十一面観音像はともに檀像様ともいべき彫技を示しています。檀像とは、檀木による一木造で、素地のままである像を指し、日本では檀木が入手し難いため代用材が用いられるのが普通です。ところが九世紀も後半になると「檀色」という言葉があらわれてきます。本来の定義からははずれることになるのですが、檀像彫刻の影響を受けた彩色像が生まれてきたのでしょう。延暦寺像や園城寺像もこうした系譜の中に位置付けられる彩色檀像と考えられます。さらに一歩進めると、共木で刻出する胸飾や釧なども別木で矧付けることも行われるようになったのではないのでしょうか。檀像様の展開、影響関係は幅広く考えることも必要でしょう。こうした観点から、常教寺の観音菩薩像も檀像様の彩色像のひとつとしてとらえられるとおもいます。

石山寺の維摩居士と兜跋毘沙門天

石山寺は東大寺造営のための木材の集積地にあった石山院が発展した寺院で、造石山寺所は造東大寺司の一組織でした。古い寺歴をもち、平安時代からは真言宗に所属するよう

になりました。

木造維摩居士坐像は九世紀末の作と考えられ、像高49.5センチの完全なる一木造です。像底より円錐状に内削りを施しているにもかかわらず、地付き部から左顎にかけて大きな亀裂が走っています。頭巾をいただく頭部の大きさに比べて、体部は圧縮された姿にあらわされています。頭・体部をつなぐ箇所には毛筋彫のない顎ひげがたっぷり造りだされており、この像を大きく見せる効果を上げているようです。

維摩居士は病臥中より身を起し、脇息によりかかって文殊菩薩と法門を談じたといえます。この像の柔和な表情を見ていると、とても病中であったとはおもえません。法衣の衣褶の彫りは切れ味が鋭く、翻波も交じています。やはり檀像風になる作です。彩色はほとんど剥落しており、わずかに両耳や顔面、衣袂の一部に残るのみで、脇息には緑青で花文を配しています。当初の彩色はあざやかであったでしょう。比叡山にも同じころに制作された維摩像があります。しかしその作風は

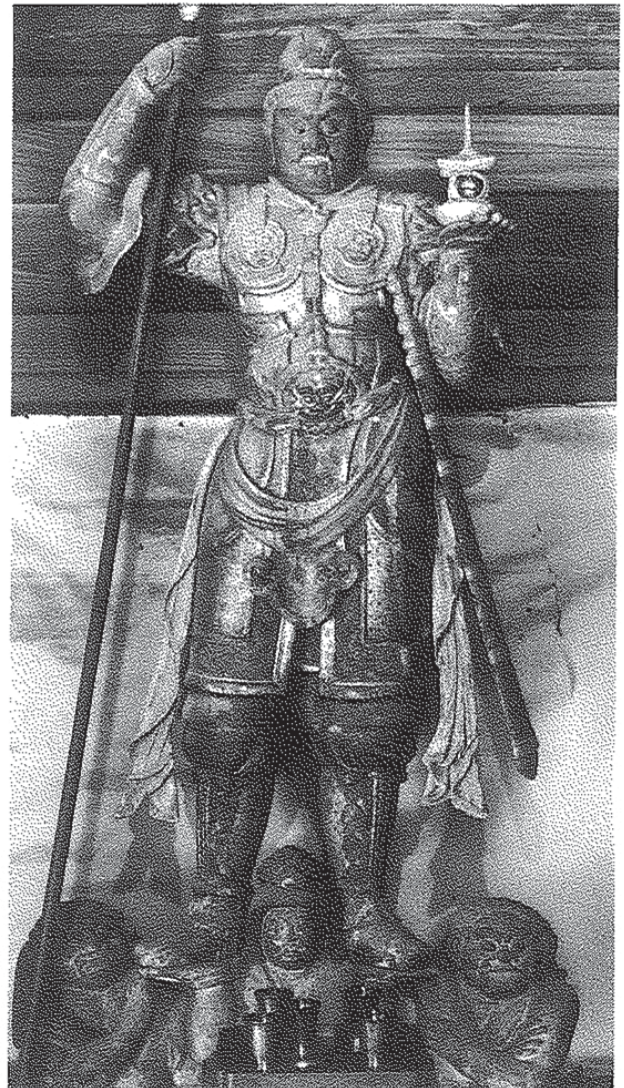


維摩居士坐像 石山寺

大きく異なっており、別系統の図像によっていることが知られます。

石山寺毘沙門堂に祀られる木造兜跋毘沙門天立像も九世紀末ないし十世紀初頭を降らないと考えます。王城鎮護・外敵破碎のための像で、平安京には羅城門の楼の上に安置されていました。東寺の兜跋毘沙門天像は、羅城門から移されたといい、唐から請来された像です。のち東寺像の模刻が盛んに行われ、本県では善水寺像があげられます。

二鬼を従える地天の掌上に立つ本像の像高は172.5センチあり、体部には通形の唐様甲に近い甲をつけています。この服制は東寺像とはことになっており、一種の和様化とされています。ただ腰甲などに漆箔に毘沙門亀甲を墨描するのは、いわゆる金鎖甲を意識してい



兜跋毘沙門天立像 石山寺

るからでしょう。和風化像として石山寺像は観世音寺像とならんで、この種の作例の中では代表的な作といえます。

一材より根幹部を彫りだし、所々に乾漆を盛った上に彩色を施しています。この像の作者は、奈良時代の官営工房の流れをくむ伝統の中で育まれた仏師だと考えます。穏和な量感をもつ作風からもこのことはいかがえられるでしょう。

狛坂寺磨崖仏

これまで木彫について述べたので、ここで石彫像を紹介します。近江では何といても栗太郡栗東町の金勝山中にある狛坂寺の磨崖仏です。高さ6メートルを越す切立った花崗岩に刻まれ、中央に転法輪印を結び宣字座に坐す如来像（像高235センチ）、両脇には中尊に向かって腰をひねり、内側の手を胸前におく菩薩立像が蓮華座上にあらわされています。この三尊の上方や左右に刻まれる仏・菩薩像と右前方別石の三尊仏は後世に刻まれたものです。

金勝寺別院であった狛坂寺は現在廃絶し、磨崖仏だけが残っています。狛坂寺の創建は弘仁年中(810～824)に金勝寺を開いた興福寺の僧願安によってなされたと伝えられています。制作期もそのころにおいてよいと考えますが、その様式は新羅石彫像の影響を多大に受けており、また奈良時代後期の遺風をも伝えています。寺名からもうかがえるように、朝鮮半島からの渡来人の存在が想定されます。なお天長10年(833)9月に定額寺に列せられた金勝寺には九世紀の彫像が一軀も伝存されておらず、十世紀初頭と考えられる木造毘沙門天立像が最古のものです。

おわりに

十世紀初には九世紀の遺風を伝える像が制作されています。例えば石山寺の大日如来坐像は、焼失した高野山金堂像をしのばせる作



狛坂寺磨崖仏

風をみせています。また木之本町観音寺の伝千手観音立像は、像形より准胝観音とすべき像です。重量感にあふれ、県下に准胝観音像はこの一軀しかありません。

十世紀彫刻の展開は、平安後期彫刻への過渡期にあたり、近江では天台宗の彫像が大きな係わりをもちます。承平5年(935)に火災をこうむった延暦寺では承平年中に3人の大仏師をおき、延暦寺仏所ともいべき工房を設けます。天台宗がその勢力を拡大し、各地に安置される十世紀以降の平安彫刻には、あきらかにひとつの流派を想定せざるをえません。そのなかで高月町充滿寺の薬師如来立像は平安前期彫刻の下限を示す一例だともいえます。正暦4年(993)の結縁交名記を像内に納入する善水寺薬師如来坐像になりますと、穏やかな風貌を示し、衣褶の彫りも浅くなり、和風化がかなり進んだものとなっています。この像こそ、近江における平安後期彫刻の出発点となるでしょう。(佐々木 進氏提供)